

埋蔵文化財発掘調査事業

①上之土地区画整理地内遺跡発掘調査

1 実施の状況

上之土地区画整理地内遺跡のうち2遺跡（諏訪木遺跡・上之古墳群）において発掘調査を実施した。

また、箱田氏館跡において、現在発掘調査を実施中である。

2 諏訪木遺跡・上之古墳群

(1) 期間 平成24年9月6日～平成25年1月10日

(2) 面積 950m²

(3) 遺構・遺物

弥生時代：方形周溝墓4基、弥生土器（壺）

古墳時代：竪穴住居跡7軒、竪穴状遺構3基、古墳（周溝）1基、方形周溝墓1基、大溝1条、土師器（小型丸底壺、高坏、壺、甕等）

奈良・平安時代：溝跡、須恵器片、土師器片

中世：区画溝1条

近世：大溝1条、溝跡、井戸跡6基、木製品（井戸杵）、獣骨、五輪塔（空風輪）

(4) 特記事項

上記の時代が錯綜して重複しており、見極めが難しい状況であった。なお、遺構・遺物の内容については整理報告前の段階であり、現状での判断である。

調査は東西で分割し、反転しての調査を実施した。弥生時代は、中期後半に帰属すると考えられる方形周溝墓4基を検出し、いずれも四隅切れの形態であった。そのうち2基から完形の弥生土器壺が出土している。

古墳時代は、後期の古墳1基を除き、前期に帰属すると考えられる。方形周溝墓は東南隅・東北隅がつながる形態とみられ、弥生時代の方形周溝墓と重複する状況である。土師器小型丸底壺・高坏が出土している。大溝は幅5mほどあり、土師器小型丸底壺・高坏等の祭祀色が強い土器群が検出され、溝南側壁面は立ち上がって途切れる。これらの状況から、調査区外西側へ広がる周溝墓の可能性があり、溝の規模からは大規模な遺構となることが想定される。

中世は、平成23年度調査で確認された区画溝の続きであり、平面形状は北上・西折・北上とクランク形状を呈することが判明した。特異な平面形状から、館跡の一部である可能性が高まったといえる。

近世は、大溝1条を含む複数の溝跡と井戸跡が検出されている。大溝から、陶器片、焙烙、空風輪（五輪塔の一部）が出土している。井戸跡は、素掘りのもの、石組みで底面に木杵が残るもの、導水路が繋がっているものを検出した。石組みの井戸跡は、石組みの遺存状態がやや不良である。

恐らく、一定期間機能したが、老朽化の進行により石組みが崩落し、機能不全に陥ったため廃棄に到ったものと考えられる。なお、底面の湧水箇所は、木組みにより保護されていた。木組みは丸太の他、四角に製材された柱の転用もみられ、ホゾにより連結されていた。

また、成田小学校6年生を対象とした遺跡見学会を実施した。

3 箱田氏館跡

(1) 期間 平成25年2月1日～平成25年3月29日（予定）

(2) 面積 240㎡

(3) 遺構・遺物

縄文時代後・晩期：遺物包含層、縄文土器片

弥生時代：竪穴住居跡2軒

弥生～古墳時代：方形周溝墓2基、前方後方形周溝墓周溝の一部

奈良・平安時代：竪穴住居跡1軒

時期不明：竪穴状遺構1基

(4) 特記事項

現在の状況では、平成23年度以前の調査に比べ、遺物の出土量は少ない。また、縄文時代の遺物包含層も希薄である。遺構の検出状況は、平成23年度以前の調査で検出された遺構の続きと、次のとおり新たな遺構が検出されている。

今回の調査の新知見は、弥生時代の竪穴住居跡2軒の検出であり、前中西遺跡の範囲が北西へ拡大する可能性がある。

今年度をもって、箱田氏館跡の発掘調査は一定の区切りとなる。平成23年度の第2回文化財保護審議会で報告のとおり、発掘調査終了後に調査成果を基にして、箱田氏館跡の埋蔵文化財包蔵地について、名称変更または範囲の分割などを検討する予定である。

上之古墳群・諏訪木遺跡



発掘調査作業状況



成田小学校遺跡見学会



調査区全景（反転前西側・南から）



調査区全景（反転後東側・北から）



弥生時代・方形周溝墓①（南東から）



弥生時代・方形周溝墓②（南東から）



古墳時代・方形周溝墓（北東から）



古墳時代・大溝（南から）



方形周溝墓周溝・弥生土器壺出土状況①



方形周溝墓周溝・弥生土器壺出土状況②



古墳時代大溝・土師器小型丸底壺出土状況



古墳時代大溝・土師器壺出土状況



古墳時代前期・住居跡②（北東から）



同左・土師器出土状況（北から）



中世・館跡か（南から）



近世・石組み井戸跡（西から）

②西別府 大竹遺跡確認調査

- 1 所在地 西別府字大竹1628-1、1628-5、1630-1
- 2 期間 平成24年11月15日～12月26日
- 3 面積 約274㎡（A区、B区）
- 4 遺構・遺物（別紙図面参照）
 - A区 古墳時代後期（7世紀末～8世紀初頭）：竪穴建物跡1棟、土師器等
平安時代 9世紀後半：竪穴建物跡1棟、土師器、須恵器、灰釉陶器等
10世紀前半：竪穴建物跡2棟、土師器、須恵器、須恵系土師質土器等
時期不明：竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑3基等
 - B区 古墳時代後期（7世紀末～8世紀初頭）：竪穴建物跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土師器、須恵器、小札片等
奈良時代 8世紀後半：竪穴建物跡1棟、土師器、土錘等
平安時代 10世紀前半：竪穴建物跡1棟、土師器、須恵系土師質土器等
時期不明：竪穴建物跡1棟、土坑11基等

5 特記事項

調査の目的は、遺跡の南方にある深谷市下郷遺跡から延びる幅6mの古代の道路跡の行方を探るものであったが、残念ながら今回の調査では確認できなかった。

調査では、主として飛鳥～平安時代（7世紀末～10世紀前半）の集落跡の存在が確認され、竪穴建物跡11棟、掘立柱建物跡2棟等が確認された。この集落は、遺跡の北側に広がる古代の幡羅郡家（郡役所）を支える周辺集落と考えられ、1棟の竪穴建物跡からは、桂甲という鎧の小札片と考えられる鉄製品が出土した。

なお、この遺跡名の「大竹」は、「大館」とも考えられ、かつて大きな館があったとも想像され、幡羅郡役所との関係で興味深い地名である。



古墳時代後期・竪穴建物跡土器出土状況



古墳時代後期・小札出土状況

